

## 日本台湾交流協会の事業御紹介

# —台湾人高校生の日本長期留学プロジェクト—

公益財団法人日本台湾交流協会

総務部 宮崎葉津子

### 新事業の開始

昨年4月、日本台湾交流協会初となる高校生を対象とした長期留学プログラム「台湾高校生日本留学事業」が始動した。本事業は、台湾の高校に在籍する台湾籍高校生を対象に、日本への高校留学を支援するもので、双方向の交換留学ではなくインバウンドのみ、留学期間は台湾の学年制に合わせた8月から翌年7月までの11ヶ月間である。

本プロジェクトが企画された背景の一つには、現在台湾における日本語世代と呼ばれる層の高齢化がある。日本統治時代を体験した知日派の多くがすでに業界から一線を退いており、若者達はエンタメ・サブカル等を通じて日本に親しんでいるものの、一方で欧米志向も強い。この現状を受け、次なる世代に改めて親日の種を撒き、日台友好の架け橋となる人材育成を目的として、新事業に着手することとなった。

日本台湾交流協会では長年に亘り大学生・大学院生に対する奨学金事業を実施しているが、高校生、それも約1年の長期留学となると勝手は異なる。募集・選考基準の設定、台湾側教育機関への協力依頼に始まり、日本側の受入校・ホームステイ先のマッチング、来日後の行政手続きや留学生活の様々なサポート等、未成年として配慮すべき点、受入団体側が主体となってアレンジすべき事柄が諸々あり、高校留学プログラムに知見ある他団体にノウハウを学びながら、一から手探りで準備を進めた。

### 学校選び

なかなか一筋縄でいかないのは、受入校の開拓である。文部科学省によるSGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）認定校の登場等、高校国際教育は年々活発になりつつあるものの、長期留学生の受入土壌は依然として発展途上という印象だ。学校全体が日々の業務に忙殺され余裕がないということもある。また国際教育に積極的であったり、台湾との学校交流が盛んであったりしても、あくまで教育旅行や短期交流の範囲に留まり、長期受入には消極的であったりする。訪問した高校の中で「これほどグローバル化が叫ばれていても、校内では日本語がままならない外国人生徒を授業で教えることを敬遠する先生が少なくない」と漏らす担当者もいた。

その一方で、積極的に台湾とつながりを持ちたいという高校や、海外へ留学することばかりではなく留学生の存在によって校内の国際意識を育てたいという熱意ある高校に出会えることもあり、1期生の受入校はそうした高校が大半を占めている。

### ホームステイ探し

何より最大の難関はホームステイ先の確保だ。現在は手配業者に委託しているが、日本では欧米ほどには未だホームステイ受入がポピュラーではなく、ホストファミリーの絶対数が少ない上に、大学生以上や短期滞在の受入のみという家庭が比

較的多い。加えて、ホストペアレンツが共働きというケースが多いことから、食事の用意等の負担がある高校生の長期受入にはそう簡単には手が上がらない。たとえ良い高校を見つけても、通学圏内にホームステイ先が確保できなければ、派遣を諦めざるを得ない。

それでも1期生のホームステイ先には、半年から11ヶ月フルの受入を引き受けてくれるホストファミリーもあり、留学生と本当の家族のような関係を築いているのを見ると、心の底からありがたく感じる。

### 第1期留学生

台湾全土から集まり、爆弾低気圧のなか行われた面接を乗り越え、約4倍の倍率をくぐりぬけた記念すべき第1期生は、女子13人、男子2人の計15人。昨年8月27日に来日し、東京で4日の研修を終えた後、各留学地へ派遣された。今回の受入先となったのは、北は北海道から西は三重県まで、公立5校、私立8校の全13校で、中には長期の留学生受入は初めてという学校もあったが、積極的に協力いただいたおかげで、ほとんど大きな

問題なく留学生の学校生活が開始した。

本事業の留学生は、日本語能力試験4級相当以上の日本語力を応募資格条件としているが、1期生のお大半が日本語学科出身ということもあり、日本語力は総じて高く、留学開始当初こそ授業や同級生との会話スピードについていくのに苦戦していたものの、数か月もするとすっかり慣れ、他の一般生徒と見分けがつかないほど溶け込んでいった。

しかしそこに至るまでには留学生達の大変な努力があった。台湾と日本は文化的に比較的近いが、それでも生活習慣や物事の考え方に差異はある。友達作り等の学校の悩みばかりでなく、ホストファミリーとの相性等の問題もある。毎月のレポートには、留学生達が文化の差に葛藤しながら、忍耐強く日本の高校や各ホームステイ家庭の生活に適応していく様子が伺え、長期留学が受入側のみならず留学する側にとっても決して容易でないことを実感させられる。なお、本文後には2人の留学生による実際の留学体験記を紹介しているので、是非そちらもご一読いただきたい。



来日時に駐日台北経済文化代表事務所を表敬訪問



中間研修では3.11で被災した大槌町の高校生達と震災学習を通じて交流

## 高校留学の意味

高校留学における受入校開拓、ホームステイ先確保、そして留学生の適応といった問題は、どのようなベテラン団体であっても毎回直面している。しかしそうした困難があってもプログラムを継続しているのは、高校留学だからこそその潜在的価値を見出しているためだ。人間は大人になればなるほどアイデンティティや価値観が確立するため、ネイティブレベルで他国の価値観を共有し同化するのが次第に困難になっていく。しかし高校生という思春期で柔軟性のある年代は、留学でより早くより多くのことを吸収し、吸収したことを“借りモノ”ではなく自分のものにしやすいのだと、長年の経験から実感をもってそう語る受入団

体職員もいた。更には、高校留学によって育まれた絆が、何十年後に国と国を繋ぐ大きな助けとなった事例を目の当たりにしたともいう。

当協会の高校留学事業は今年でようやく1年。撒いた種が芽を出し、花を咲かせ或いは大樹に育つまでには長い時を要する。上述のような成果を実感できるのはまだまだずっと後のことになるだろう。

ついに迎える7月21日には、11か月の使命を終えて1期生達が台湾へ帰る。そして翌8月には次なる留学生が来日する。彼らがいずれ大学に進学し、社会人となり、どのように日本に関わっていくのか、楽しみに見守っていきたく思う。



## 私の留学生活 ～11ヶ月を振り返って～

留学先：東京都立翔陽高等学校2年

所属：文藻外語大学2年\*

馮翊甄

合格発表から留学がもうすぐ終わる今まで、時間の流れが速くて、一年というのはこんなに短いのが初めて知りました。しかし、それも私が充実した一年を過ごせた証の一つですね。

日本で体験したいイベントの中で不可欠なのはやはり、祭りや着物や花火大会だと思います。ですが、色々な体験の前に、現実的にもっと心配する必要があるのは学校生活とホームステイなのです。自分の努力は当然として、留学の質は留学先

の学校とホストファミリーの環境と大きく関わっています。幸いに、今回私が出会った人たちは、皆親切で、色々助けてくれる人たちでした。

### 最初の目標

- 1、日本語もっと上手に話せる！
- 2、日本の文化や生活をもっと理解する！
- 3、友達作る！
- 4、祭りなどたくさん体験する！

## 5、日本語能力試験合格！

せっかくのチャンスで留学に来ましたから、この一年間を無駄にしてはなりません。こういう決意をもって、日本へ向かいました。初めて家から出て、家族がいないところで生活するのに、あまり怖いと思わず、やる気満々でした。ですが、来た頃はやはりまだ慣れていないことが多く、会話するときもなかなか緊張していました。生まれてからずっといた環境と全く違い、学校も一緒に住んでいる人も言語でさえ違います。それでも、これらの困難を越えて、目標に向けて頑張りたいと思っていました。

### 困っていたこと

留学は、日本で日本語を勉強するではなく、日本語で知識をもらうのです。学校では当然日本語で授業をしますが、入学のときはほぼついていきませんでした。解決方法としては、クラスメートに聞いたり、放課後に家で復習したりしました。しかし、そのときの私はまだ誰も知らなかったもので、聞くのもちょっと緊張していました。日本の女子たちは仲良くなりやすいと聞きましたが、実際にはそうではないかもしれません。今もそうですが、私がわからないところがあって、クラスメートに聞くときは、いつでも優しく説明してくれていて、ありがたいです。

ところが、日本語の理解力は部活にも影響がありました。ダンス部に入っていますが、ダンスが上手になれるように、自分の練習以外は他人のアドバイスも非常に重要です。最初は先輩たちが言ってくれたコメントの意味でさえ、知りませんでした。なので、何回も同級生の人に教えても

らっていました。

一年後の現在は、前言った問題はほぼなくなりました。授業中にちょっとボーとしても、先生が言っている内容も分かるし、部活のときも、コメントをもらうだけでなく、うまく自分の意見も述べるようになりまして、すごく嬉しいです。他の人と会話するときにはもう緊張しなくなったのは自分の進歩が一番見えたところだと思います。

### 学校生活

一年もない間にクラスの皆とこんなに仲良くなれるとは思いませんでした。クラスの皆と誰でも話せるようになりました。二年生になったとき、クラス変えて違うクラスになったともかかわらず会うたびに笑顔で話しかけてくれます。こんなに仲いいクラスは私が台湾にいた時もなかったのです。毎日、学校に行くのを楽しんでいます。学校に行くと、大好きな友達がいる、好きな授業もあって、優しい先生たちもいます。

また、日本の学校生活といえば、もう一つ重要なのは部活だと思います。正直に言うと、部活は私の留学のほぼ半分を占めているのかもしれませんが。ダンス部なので、公演か大会があったりします。忙しいときは一週間のなかで休みがないこともあります。放課後にすぐ更衣室に行って着替えしてから、部活の準備をするのは毎日の日常です。筋トレとか体幹はとても疲れますが、慣れたら、その辛さも楽しさになるかもしれません。できるようになったときは本当に嬉しかったです。

前も言ったとおり、部活はほぼ毎日やっているもので、部員と一緒に時間も長かったです。好きなことを一緒にやって、もっと上手くできるように一緒に練習して、私にとって共に成長できる大切

な仲間たちです。

クラスメートも部員たちも、彼らがいてくれたからこそ、私がこんなに充実した学校生活を送ることができました。

### ホームステイ

昔からずっと日本のホームステイを体験してみたかったのです。ホームステイは日本の家庭生活や文化や食生活をもっと理解するための近道だと思います。それだけでなく、学校の人と違い、生活環境がさらに違うため、多様な人と接触することができます。

一年も一緒に暮らしてきて、本当の家族みたいな感じです。この一年間の中で、毎日毎日美味しい弁当も作ってくれたり、私の悩みも聞いてくれたりしてくださっていました。朝の「おはよう」も、学校から帰ってきたときの「お帰り」も、暖かい言葉で元気がもらえます。海外にいても、安心な居場所があって、寂しいと思ったことはなかったです。



大好き大好きなクラス。留学期間ずっと支えてくれた人たちで、一年間ずっと一緒！クラス最後の行事の球技大会の写真でした。

### 結語

この一年間を通じて、私も色々成長したと思います。日本語もそうですが、それだけでなく、自立度や時間管理の能力なども良くなった気がします。ここでは勉強のほかにもレポートとかやることがいっぱいあります。そのため、時間をもっと有効に使わないとならないのです。例えば、通学が一時間くらいかかる私にとっては、一日中に二時間が無駄になってしまいます。そうならないように、電車中で単語の勉強をしたり、ニュース読んだりします。このように、時間分配についても日本語能力についても良くなる方法のひとつだと思います。

また、もうひとつ勉強になったのは、「試す」ということの大切さです。違う国で、学校も日常生活もたくさんの違いがあるのです。その故、やったことないことか苦手なことも少なくありません。しかし、こういうときこそ恐れずに、勇気を出してやります！ やって見ないと、どうにもならないので、とりあえず最初の一步を出しましょ



体育祭でのダンス部。皆と楽しくやりました！ 道具係りの仕事も笑いながらやっていました。

う。きっとできるようになりますから。この勇気を教えてくれたのもこの一年間の経験からなのです。

短い時間なのに、こんなに素晴らしい人たちと出会えて、好きな勉強もできました。皆のお蔭で

充実な毎日を過ごして、いっぱい思い出も作れて、感謝すべきことが多すぎます。皆大好きです。ありがとうございました！ 最高で素敵な留学でした。



## 私の留學生活 ～11ヵ月を振り返って～

留學先：札幌聖心女子学院高等学校 3年  
所属：台北市私立靜修女子高級中學 2年  
王恬芯

私は昨年8月末から、11ヵ月の留學生活を経験しました。その間私は札幌聖心女子学院に通い、寄宿生として過ごしました。札幌聖心は全校生徒約180人の小さな女子校です。生徒の3分の1は日本全国から来た寄宿生です。しかし、一度も自宅に帰らずに、一年もの長い間寄宿生として過ごす留學生は私が初めてでした。

最近、1年という時間はなんて速いのだろうと思い、この前留學の先輩がおっしゃっていた事を思い出しました。「1歳の時、1年は1分の1だけど、2歳になったら、1年が自分の2分の1になる。今は人生の18分の1の時間だから、1年は今までより速い感じる」ということです。確かに、18歳の私だから1年が速く感じることもあるかもしれませんが、でもそれだけではありません。とても充実していたので、速いと感じたのだと思います。

最初はとても不安で、時間があつたらすぐイン

ターネットで「海外留學の経験」や「海外での生活の方法」をたくさん調べ、他の留學生にも相談しました。そして、ある時こんな言葉が出てきました、「私たちが置かれている状況は、他人と同じようであっても全く同じではない。その状況を正確に認識して、その上で自分の生き方を決めねばならない。つまり、生き方は千差万別である。他人と同じ生き方はできないのである」。私はどんなに多く他の人の経験を見ても、自分でやってみなければ何も始まらないのだということが分かりました。

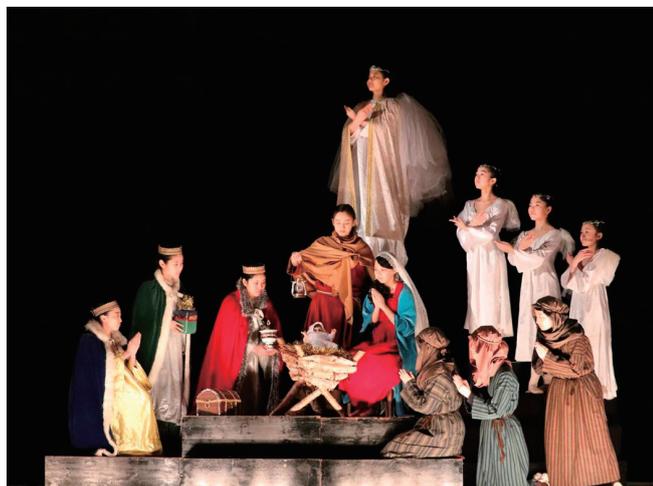
寄宿舎には集団生活をするためにたくさんの決まりがあります。私は先生や上級生と一緒にいたら、自分が扉を開けて先に通っていただくというドア通しを始め、お皿洗い、洗濯、お祈りなどの生活面の礼儀やルールを学び、頑張っけて寄宿舎の決まりに慣れました。学校でも他の生徒と同じように授業や行事に参加し、友達を作ってきました。

私は明るいので、台湾にいるときはなるべく自分から友達に話しかけていたけれど、日本に来た時、みんなのことを知らず、話題もなかなか出てきませんでした。その結果、自分から話しかける勇気がなかなか出てきませんでした。ところが、クラスと寄宿舎のみんながやさしくて、話しかけてくれ、色々なことを教えてくれたので、本当に助かりました。小さな学校だからこそ、みんなすぐに私のことを知り、先輩後輩関係なく、挨拶をしてくれたり、遊んでくれたりして、仲も良くなれました。ただし、長期休みの時、寄宿舎は閉鎖になるので、ホームステイをしなければなりません。学校内でなかなか長く受けられる人がいなくて、冬休みの一か月に5回ほどホームステイ先を変えました。それぞれの食事時間や習慣などが違うので、体内時計が安定せず、心身とも慣れることを精一杯でした。

この11ヵ月のうち、生徒が受ける定期試験は4回ありました。最初、私は受けませんでした。授業に参加するうちに少しずつ内容が分かるようになり、3月の高2の学年末試験は、国語以外のすべての科目を受けました。全校で行われる地理コンテストにも参加し、日本の47都道府県と庁

所在地を覚えて、満点も取りました。日本の英検も受けて、2級も取りました。台湾の高校にいた時、私のクラスも日本からの留学生がいましたが、私とは違い、テストも受けられなくて、授業さえ一緒に受けられませんでした。テストや授業の内容を理解するのも結構時間がかかるし、ストレスもあるけれど、みんなと同じの目標を目指し、本当に楽しかったです。違う環境で生きてきた為、違和感を感じたこともありましたが、留学生を特別視しないこの学校で、留学する前に思っていたよりも楽でした。

学校の活動も色々参加できる機会がありました。一番印象に残っているのはクリスマスコンサートです。聖心女子学院はカトリックの学校で、クリスマスの行事を大切にしています。私は、クラスの友達に誘われてタブロー（キリスト降誕の無言劇）のオーディションをうけ、聖母マリア役に選ばれました。役に選ばれた時は、単純に嬉しかったのですが、練習が始まると、セリフこそありませんが、台本を理解するのも難しく、先生のおっしゃっていることが分からなかったり、叱られたりしました。しかし、タブローにかかわる仲間たちやクラスメイトが励ましてくれ、支えて



くれたので、頑張って休み時間を使い、先生に教えていただき、たくさん練習しました。コンサートの公開日に、最後のシーンで涙を我慢しながら、舞台に立ちました。台湾でもあのような大切な役で舞台に立ったことがなかったので、不安に打ち勝てて、とてもいい経験と思い出になりました。

この1年は朝から晩まで、ずっと日本人と一緒に暮らしているので、日本語を学んだだけではなく、だんだん自分からみんなの真似をして、文化の違いと習慣の違いを学んできました。初めは同アジアの国だから、そんなに違いがないと思っ

てきましたが、日本人からすれば当たり前のことでも、私から見たら、慣れる時間が必要です。でも、逆に、来る前一番心配した友人問題はほとんどありませんでした。以前、留学の経験者から、「日本人と友達なるのが難しい」「外国人と思われて気を使われる」などの話を聞きましたが、ここでは全然そのことに困らなかったです。

大変なことがたくさんあったけれど、もしもう1回1年前に戻られたら、同じく留学の決定にします。何回も台湾に帰りたと思ったことはありましたが、後悔したことはなかったです。

